

『とりかへばや物語』と『源氏物語』：〈物語取り〉 の一側面

辛島，正雄

<https://doi.org/10.15017/2332663>

出版情報：文學研究. 80, pp.95-113, 1983-02-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

『とりかへばや物語』と『源氏物語』

— 〆物語取り〷の側面 —

辛 島 正 雄

は し が き

後期物語の研究にあつては、『源氏物語』を軸として、先行物語の影響がいかに現われているかを明らかにする、所謂〈影響論〉が、かなり大きな位置を占めてきた。このことは、後期物語の性格が、周知のごとく、『源氏物語』の達成を一つの出发点として、表現・内容ともにその甚大な影響を蒙っている事実からすれば、当然のことであり、今後ますますその論究には精細の度が加わるものと思われる。

ただ、こうした研究の積み重ねの中にも若干の問題があるとすれば、影響関係の指摘・証明にとどまっていることが多く、似ているからどうなのか、相異は何を意味するのか、といった、後期物語の側に立っての解釈のなされることとあまりにも少ない点であろう。影響論のあるべき方向性については、今さら説くまでもないことだと思われるが、鈴木一雄氏の言を借りれば、「作品研究の一環であり、その作品の本質解明にこそ目標がある」といえる。「一つの作品という綜合体の中から、以前の作品の類似的要素を指摘してみたところで、ただそれだけで事足りりとするのであったら、それは知識的遊戯にすぎない」との秋山虔氏の言は、肝に銘じておく必要がある。

筆者も、こうした先学の驥尾に付して、『とりかへばや物語』についての若干の考察を試みたことがあるが、「作品

の本質解明」とは、言うは易く、やはり影響作品・被影響作品双方への深い理解なくしては、到底なしうるものではなく、その実践のむづかしさを痛感させられたことである。

本稿は、前稿にひき続き、『とりかへばや物語』における『源氏物語』撰取の様相を具体的に検討してみようとするものであるが、巻一後半の吉野の宮の登場から、中納言(女)の吉野行きあたりに限定して取り上げ、やや特異な撰取の方法を見ると同時に、かたがたその性格の一端にも及びたいと思う。

一

ありうべからざる妻四の君の妊娠に、中納言はいよいよ厭世心を深める。

「なぞや、いと憂き世の中に、せめてながらふべき。親の御思ひなどを深くたどるほどに、かかる事(四ノ君ノ妊娠)も出で来ぬるぞかし」など、干々に思ひあくがれて、見えぬ山路たづねまほしき御心ぞ、やうやう出で来にける。(49)

ここに至る筋のはこびは、桑原博史氏のいわれるように、「出家遍世譚の経路を描くかのよう」(5)であり、これに対応するかのごとく、物語の表舞台にひとりの人物が呼び出されることになる。吉野の宮である。

そのころ、吉野山に、宮と聞こゆる人おはしけり。

(49)

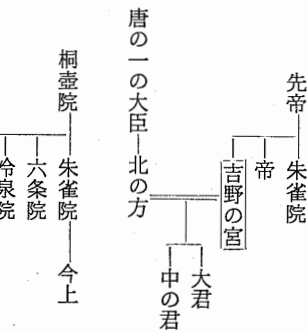
ここはもちろん巻頭ではないが、非常にあらたまった書きぶりである。これと同じ形式で『源氏物語』のいくつかの巻が始められていたことを思い合わせたい。鈴木一雄氏は、こうした起筆が、「常に、すでに物語中に忘れ去られ、関心のそとに投げ出されていた人物、あるいはある必要から、途中から登場を余儀なくされた人物が、にわかにかに重い役割をもってあらわれるときの紹介、再紹介(中略)と結びついている」といわれたが、これも同断である。そして、この一文からは、当然ながら、宇治十帖の発端、宇治の八の宮父娘を登場させる「橋姫」巻巻頭が想起されねばなら

ない。

そのころ、世に数まへられたまはぬ古宮おはしけり。

以下、『とりかへばや物語』においても、「橋姫」巻においても、それぞれの宮の半生がしばらく振り返られることになる。

さて、その半生であるが、従来も諸家により両者の類似はしばしば説かれており、今さら私が逐一双方の文章を対比しながら見てゆくまでもないと思われるので、詳細は省略に従う。もっとも、このあたり、類似を強調してみたところで、あまり意味はなさそうである。たしかに、その設定は、ほとんどそのまま踏襲されている、といつてよい。



すなわち——ふたりの女子をつづけて産んだ後、北の方が死ぬ。宮は、北の方への愛情ゆえこの世にあったことを思うと、悲嘆に昏れ、念願の出家も果たしたく思うが、残されるふたりの姫君のことが気がかりで、それもかなわない。再婚の話も出るが、宮は聞く耳をもたない。後、政争にまきこまれ、ついに人里離れた宇治や吉野に退居し、世間との交わりを絶ち、姫君たちの存在も秘していた——おおむね以上のごとくである。また、それぞれの人物関係を系図にしても、その対応ぶりにはいちじるしいものがある。

しかし、こうした密着度もさりながら、叙述にあたつての表現の質の違いを見逃すわけにはゆかない。『とりかへばや物語』の表現は、終始簡略かつ説明的で、ほとんど無味乾燥といわざるをえない。「橋姫」巻の水鳥によせる唱和のごとき、父娘のつらく寂しい生活を彷彿させ

(109頁)

具体的な描写は、まったく見えないのである。このことは、場面性の優位という、当時の物語一般の基本的性格からすれば、作者がこの叙述に力を入れていないというのと、ほとんど同義であろう。「そのころ、……」と、随分かしまつて始まった吉野の宮の紹介だが、吉野の宮その人のことを語るよりは、作者は先の展開を急ぐ。読者先刻承知の八の宮の経歴をほとんどそのまま流用することで、安々と目的地まで運んだ、という次第である。

ただ、いかにも八の宮の忠実な再現、物真似のごとくに見られる吉野の宮であるが、その人物像には相当の違いがある。それは、登場の最初から明示してあるのである。

先帝の三の御子にぞおはしましたしける。よろづの事すぐれて、おくれたる事なく、世の人のしとすること、方々の才、陰陽・天文・夢解き・相人などいふ事まで、道きはめたる才どもなりける。この世にあまりすぎて、昔は遊学生とて、十二年に一度、唐土もろこしにさるべき人渡しつかはして、かの国の才ならはされけり、末の世となるままに、人の容面ようめ・根性、いとわるくなり行くにより、唐たうに渡る人絶えにたるを、われ渡らんとせちに申しこひて、渡りたまひにければ、その国に待ち受けて、「日本の人あまた渡り来ぬ、わが国にもかしこき人多かれど、道々の才、かばかりかしこき人、なかりき」と、おどろきあふぎて、云々

(49~50ペ)

ここに浮彫りにされるのは、ずばぬけた学才と探究心とを併せもつ宮の姿である。その学問的情熱は、ついに異国唐におもむかせるまでに至るが、その地でさえ宮の万般の学才に並びうる者はなかった、とする。これは、八の宮が、父帝にも女御にも、とく後れきこえたまひて、はかばかしき御後見のとりたてたるおはせざりければ、才など深くもえ習ひたまはず。まいて、世の中に住みつく御心おきてはいかでかは知りたまはむ。高き人と聞こゆる中にも、あさましうあてにおほどかななる、女のやうにおはすれば、(中略)はかなき遊びに心を入れて、生ひ出でたまへれば、その方はいとをかしようすぐれたまへり。

(116~117ペ)

と描かれていたのとは、正反対でさえある。

結局、『とりかへばや物語』の構想の上で有意味なのは、八の宮と重なる部分であるよりは、ズレてくる部分なのである。それは、紹介のしめくりに、

「ざりとも、おのづから、いささかも（姫君タチガ）人めき出でたまふ道のしるべは、かならず出で来なん」と、心に深く思しさととりて、契りさだめたる人を待たむやうに思しけり。 (53ペ)

とある吉野の宮の描かれかたにも端的にうかがえるところだが、すぐれた学才（とくに未来を予知する能力）の持ち主であることを前提として、八の宮がとったのは全く別の方向を示しているのである。

二

吉野の宮の紹介が一段落すると、

中納言、いとど、「いかで世にあらじ」と思しなることまざりて、二云々 (53ペ)

と、紹介の始まる直前の文章を確かめるようにして、物語は本筋に復し、中納言と吉野の宮のめぐりあいへと進められる。

さて、ここでの筋の運びかたもまた、すでに指摘のあるごとく、『源氏物語』における薫と宇治の八の宮とのめぐりあいを意識したものであること、容易に感得されるところである。今は、当面の考察の対象ではないので、これまで指摘されることのなかった例を一つ示すにとどめる。

中納言が吉野の宮のことを詳しく聞かされた時の心中思惟、

世をそむかんも、むげに山伏などのあたりにはち寄りて、その人の弟子になりてあらんは、さすがにもの恐ろしくわびしかるべきを、(吉野ノ宮ハ)御心ばへもありさまも、なべてにはものしたまはじかしと、今までわが思ひ寄らざりけるよ。 (53ペ)

これは、薫と八の宮の親交がはじまるくだりに、

聖だつ人才ある法師などは世に多かれど、あまりこはごはしうけ遠げなる宿徳の僧都僧正の際は、世に暇なくすくにて、ものの心を問ひあらはさむもことごとしくおぼえたまふ、また、その人ならぬ仏の御弟子の、忌むことを保つばかりの尊さはあれど、けはひ卑しく言葉たみて、こちなげにもの馴れたる、いとものしくて、昼は公事に暇なくなどしつ、しめやかなる宵のほど、け近き御枕などに召し入れ語らひたまふにも、いとさすがにものむつかしうなどのみあるを、(八ノ宮ハ)いとあてに心苦しきさまして、のたまひ出づる言の葉も、同じ仏の御教をも、耳近きたとひにひきませ、いとこよなく深き御悟りにはあらねど、よき人はものの心を得たまふ方のいとことにもしたまひければ、云々

(126ペ)

とあるがごとき薫の志向する道心と通底するものがありそうである。

九月の頃、中納言は、親しい従者数人を伴い、ひそかに吉野におもむく。中納言を迎えた吉野の宮は、すばらしいかれの姿に目を見はらされ、対話のすすむ中で、「姫君たちの人めき出でたまはんしるべなりと、御心のうちにさとり思」(57ペ)す。一方の中納言も、宮の「あまりすぐして聖たちでも見えず、あてやかに、あはれげにうち思しのとむるけしき」(58ペ)に、心をゆるす。ここにふたりの信頼の絆は、早くも結ばれるのである。

中納言が、「いはけなくより、あやしく世にたがひ、人に似ぬありさまにて、やうやう物思ひ知らるるままに、世にありにくく思ひなる」次第を語ると、宮は、「みなさ見えたまふところあ」って、次のごとく告げる。

しか御心ならず思すべき事なれど、それしばしの事なり。いかなるにも、この世の事ならず、先の世のもののみくいなれば、ともかくも、人の思すべきこの世に、世を嘆き人を恨むるなん、いと心幼なく、むげにさとりなきことにはべるべき。さらに思し厭ふべき御事にもはべらず。つひには思ひのごと上をきはめたまふべき契り、いと高くものしたまふめり。くはしく聞こえさせずとも、おのづから、さ言ひきかすと、思しあはするやうもあら

ん。うたて相人めかしく聞こえつづけじ。

(58)

「陰陽・天文・夢解き・相人などいふ事まで、道きはめたる才ども」を備えた吉野の宮の、中納言の将来についての〈予言〉である。中納言は、この時点ではまだ宮の語るところの意味を理解することができないのであるが、今後の波瀾を突き抜けて物語の大団円を予測させるという点、構想上の一画期として見過せない。

ふたりの対話はつづき、宮の話はわが娘の上に及ぶ。中納言は、姫君たちへの心配ゆえに深く山に入ることのできない宮を思い、姫君たちの後見役をすすんで引き受ける。これに対して宮は、

昔より、さらに人にかかる事ありと聞かせはべらぬを、さるべきにや、あやしきとはすがたりを聞こえ出でつるも、常の事など思ひたまへかくべきならず。かうながらも、女のみ、棄つれど棄てられず、そむかれぬものにて、あひとぶらひ人なくてははべるまじきわざとばかりを、所せく思ひはべれど、人の契り、宿世、^Aみなはべらわざなれば、さらに、この山に世を尽くせなども、遺言し思ひたまへず。しか思ひおきてはべれど、宿世といふものはべれば、それにもかなひはべらじ。人聞きおどろおどろしからず、重りかに身を用るよとも、思ひたまへず。ただ宿世にまかせてとなん。そのほどのいまだはるけきにやと、いと心苦しきが、うるさく思ひたまふる。

(59)

と語る。先に「契りさだめたる人を待たむやうに」思っていたとあったのを承けるわけであるが、八の宮が姫君たちの人並みの幸福を断念していたのとは異なり、吉野の宮は姫君たちの明るい将来を信じ、囑望する。

ここでの相異は、これまで、吉野の宮と八の宮とが、かなりストレートに結びつくようなかたちで表現されていただけに、『源氏物語』依存の姿勢から変わってきているようにも見えるが、実はそうともいえない。ここについては、従来『源氏物語』との関係の説かれることは皆無であったけれども、私見によれば、「椎本」巻の八の宮の訓戒との関連で見る必要があると思われる。

世の事として、つひの別れをのがれぬわざなめれど、思ひ慰まん方ありてこそ、悲しきをもさますものなめれ、また見ゆづる人もなく、心細げなる御ありさまどもをうち棄ててむがいみじきこと。されども、さばかりの事に妨げられて、長き夜の闇にさへまどはむが益なさを。かつ見たてまつるほどだに思ひ棄つる世を、去りなん後の事知るべきことにはあらねど、わが身ひとつにあらず、過ぎたまひにし(母上ノ)御面伏に、軽々しき心ども使ひたまふな。おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契りことなる身と思ひなして、ここに世を尽くしてんと思ひとりたまへ。ひたぶるに思ひしなせば、事にもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして、女は、さる方に絶え籠りて、いちじるくいとほしげなるよそのもどきを負はざらむなんよかるべき。

(176~177p)

傍線部 A が a を、B が b を逆手にとったものであることは、容易に納得されるところであろう。傍線部 A で、吉野の宮が、例えば病床にあるとか、特に死を意識すべき必然性も認められないのに、ことさら「遺言」なる語をもち出すところに、作者の用意を見るべきである。ここが、結局はその予感どおり遺言となってしまった八の宮の訓戒をふまえたものであることに気付かないと、「遺言」の一語は妙に浮き上がったものになってしまう。すなわちここは、『源氏物語』という先行物語の既知の文脈を交錯させるべくたくまされた文章なのであり、意図的に「ペロディ」化を狙ったものと評しても行き過ぎではあるまい。

贅言するまでもないことだが、八の宮の遺戒は、その後の姫君たちの生き方を強く縛ってしまうことになり、薫を思いながらも、ふたりの将来の幸福を信じられない大君が、この父宮の遺戒を盾に、結婚拒否を貫き通し、永遠の別れを迎えるという悲劇をひき起こす。ところが、一方の、八の宮父娘とよく似た吉野の宮父娘を登場させた『とりかへばや物語』であるが、ここにあつては、宇治十帖のごとき悲劇性は、ほとんど関心の外であるようである。姫君たちは、ともども貴顕の正妻となることで、ゆるぎない満ち足りた生活を迎えることになるし、宮も念願の安らかな宗

教生活に入ることができる。とすれば、いくら『源氏物語』の導入に心を砕いているにせよ、八の宮の訓戒のごときは、『とりかへばや物語』にあつては、ほとんど無用の混乱を招くばかりの余計ものでしかないはずで、いっそ截り捨ててしまった方が、よほどすっきりするに違いない。ところが作者は、その無用の長物をも、あえてわが作に摂り入れようとする。しかしそれは、先行物語に呪縛され身動きもとれなくなってしまった結果の、いわば消極的な模倣とは、きわやかに一線を画しているのであり、自己の物語の構想を頭において上での計算を十分にはたらかせて、先蹤を逆転して用いることで読者の意表を衝くと同時に、物語の進行にも都合のよい展開を図っているのである。こうしたきわめてへ知巧的ともいえる表現の手際は、特筆に値するであろう。

三

中納言と吉野の宮とは、すっかり心をひらき合い、互いの卓越ぶりにあらためて驚嘆するとともに、いよいよ信頼の絆を強くする。京での憂さを忘れさせる楽しく充実した時——またたく間に二三日も過ぎてゆく。

さて、今は世に廢れた琴きんを中納言が宮に所望したことから、物語は急転、中納言と姫君たちの対座の場面へと展開する。この場面は、吉野の宮の紹介から、中納言とのめぐりあい、吉野での滞留、帰京とつづく一連の進行の中で、最も多く筆が割かれており、ひとつの見せ場との意識でもって描かれたものと推察される。

ここにもまた『源氏物語』の影は色濃く落ちており、従来も多くの類似点の指摘がなされている。中でも井上君江氏のそれは詳細であり、裨益を受ける点が多いが、人物別に整理されたためもあり、また原文をつき合わせるという手続きをあまり踏まれておらず、場面性への顧慮にも欠けるため、類似点(8)が小間切にされ、どの程度本質的な影響なのか明らかにされない憾みがある。そこで、きわめて長文の引用になり恐縮であるが、行論の都合もあり、煩をいとわず両者を対照して示すことにする（上段が『とりかへばや物語』、下段が『源氏物語』）。

この（姫君タチノ居ル）御方は、すこし奥に引き入りて、ちひさやかなる寝殿の、いとことさらにことそぎたりしも、見どころあり。心とどめてもあそびたまへる人の御住み処と見ゆ。内外しめじめと人氣もせず、水にうつれる月ばかりぞさやかなる。（中納言ハ）「かかるところにいつとなくつくづくとながめたまふ姫君たちの御心のうち、いかならん」と、いみじう心苦しく思ひやらるるに、「この世近き方はなく、唐国の心地、ものすくすくしう、深きものあはれなどは知られたまはずやあらん」など推しはからるるもゆかしきに、人声もせねば、

「吉野山憂き世そむきに來しかども言問ひかくる音だにもせず

わりなのわざや」とながめ出でて、うち泣きたまへる気色、いみじうなつかしうあはれなるを、（中略）あさましきまで思さるるに、御答へなど面なく聞こえ出づべき人もなければ、いと恥づかしうわりなけれど、久しうなるもかたはらいたくて、姉宮、すこしぬざり寄りて、

絶えず吹く峯の松風われならでいかにとはん人影もなし

げに、聞きしよりもあはれに、住まひたまへるさまよりはじめて、いと仮なる草の庵に、思ひなし、ことそぎたり。同じき山里といへど、さる方にて心とまりぬべくのだやかなるもあるを、いと荒ましき水の音波の響きに、もの忘れうちし、夜など心とけて夢をだに見るべきほどもなげに、すぐく吹きはらひたり。「聖だちたる御ためには、かかるしもこそ心とまらぬもよほしならめ、女君たち、何心地して過ぐしたまふらむ。世の常の女しくなよびたる方は遠くや」と推しはからるる御ありさまなり。（橋姫「巻四」125べ）

ありつる御簾の前に歩み出でて、ついでたまふ。山里びたる若人どもは、さし答へむ言の葉もおぼえで、御褥さし出づるさまもたどどしげなり。

（薫ハ）「この御簾の前にははしたなくはべりけり。（中略）」と、いとまめやかにのたまふ。若き人々の、なだらかにもの聞こゆべきもなく、消えかへりかかやかしげなるもかたはらいたければ、女ば

ほのかなるけはひ、いみじくあてに、心恥づかしく、よしあり。(中略)(中納言へ)「かかる御簾の外、いまだならひはべらぬ事にて、はしたなく、恐ろしくも思うたまうらるれ。なうとませたまひそ」とて、^dやをらすべり入りたまひぬ。あさましくあきれまどひたまひて、うつぶし臥したまへるを、(中略)いとのとやかに、なつかしうこしらへ慰むれど、夢のやうに思ひさわぎたまへる、いとことわりなるに、中の君も身に添へて、ゐざり出でたまへりければ、うち添ひたまへるなるべし。(中略)「こはいかにとて、寄り来る人なきよ」とわりなきに、人のもてなしも、あやにくに今めかしくなどもあらず、ただなつかしげなるに、われのみ思ひさわがんもあまりなるに、心をのべて、姉宮、「隔てなしとはかかるをのみや。人の思はんところもあさまし」とあはめたまへど、「そはただおのづから心安く思しなせ。世の中にめぐらひべらん限りは、いかでこころざしの限りを尽くして、御覽せられにしがな、と思ひたまふるには、あまりおぼつかなく、隔て多かる心地して、いぶせくはべりければ、ただうらなく、我も人もうとかるまじきよしを、

『とりかへばや物語』と『源氏物語』

らの奥深きを起こしいづるほど久しくなりて、わざとめいたるも苦しうて、(大君ガ)「何ごとも思ひ知らぬありさまにて、知り顔にもいかかは聞てゆべく」と、いとよしあり、あてなる声して、ひき入りながらほのかにのたまふ。

「橋姫」卷133~134ペ

(薫へ)「山路分けはべりつる人は、ましていと苦しけれど、かく聞こえ承るに慰めてこそはべれ。うち棄てて入らせたまひなば、いと心細からむ」とて、^d屏風をやを押し開けて入りたまひぬ。(大君へ)いとむくつけくて、なからばかり入りたまへるにひきとどめられて、いみじくねたく心憂ければ、「隔てなきとはかかるをや言ふらむ。めぐらかなるわざかな」と、あはめたまへるさまのいよいよをかしかれば、「隔てぬ心をさらに思しわかねば、聞こえ知らせむとぞかし。めぐらかなりとも、いかなる方に思し寄るにかはあらむ。私の御前にて誓言も立てはべらむ。うたて、な怖ぢた

思ひたまへ寄りてなん」など聞こえたまふに、やうやう慰めてものしたまふ。(中略) ただうち添ひ臥して、この世ならず契りかたらひ臥したまふさまの、つゆばかりうとむべきやうもなきを、いかでか見知りたまはぬ人のあらん。ただいとわりなく恥づかしう、かうやうなる人のありさまを見知りたまはぬに、あやしうもうしろめたうもおぼゆ。明け行くに、いとどわりなく、はしたなしと思ひたり。白き単襲ばかり、なよよかなる御姿、いと細やかに、ものよりぬけ出でたるさまして、頭つき、髪のかかり、なべてならず、うちやられたるほど、桂にもいと多くあまれるなるべし。ゆゑ深くもてまぎらはしたまへるそばめ、いとくまなく白くうつくしげにて、いはん方なく気高く、清らにもしたまひけり。唐土の人めかしく、気遠く、人に似ぬところやなどゆかしさに、かばかり乱れつるを、いとあてに、見まほしき御ありさまかなど、あはれにめでたく、いよいよ心の限り頼め契りたまふ。男の御さま、はたさらなり。いみじくめでたき朝明の御姿を、かたみにいとめでたしと見たまふにも、明かくなり行けば、出でたまひぬ。「をかしかりける人の

まひそ。御心破らじ、と思ひそめてはべれば。人はかくしも推しはかり思ふまじかめれど、世に違へる痴者にて過ぐしはべるぞや」とて、(中略) かく心細くあさましき御住み処に、すいたらむ人は障りどころあるまじげなるを、我ならで尋ね来る人もあらましかば、さてややみなまし、いかに口惜しきわざならまじと、来し方の心のやすらひさへ、あやふくおぼえたまへど、言ふかひなくうし、と思ひて泣きたまふ御気色のいとほしければ、かくはあらで、おのづから心ゆるびしたまふをりもありなむ、と思ひわたる。

〔総角〕卷224~225ペ)

はかなく明け方になりけり。(中略) かたみに、いと艶なるさま容貌どもを、(中略) 明かくなりゆき、(中略) (薰ハ)「あな苦しや。暁の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」と嘆きがちなり。

〔総角〕卷227~229ペ)

さまかな」と思ひ出でられて、御文聞こえたまふ。

今のまもおぼつかなきをたちかへり折りても見ばや白菊の花

と世の常めきたるを、むげにさやうにとりなし気色ばむを、姫君は、あいなく、人のけはひのなつかしうあはれなりつるに、そこはかとなくうちかたらはれつるを、今ぞ、「いかなりつる事ぞ」とあさましく恥づかしきに、心地さへたがひておぼえたまへば、御返しも聞こえたまはぬを、人々いみじくかたはらいたがりきこゆれど、「かならずさしも聞こゆべき事かは」とて、やみたまひぬ。

(61~65ページ)

はじめ男は、人里離れた寂しい土地で成長した姫君たちを、ふつうの女とは様子が違っているのではないか、と想像する。交誼を求める男に対して、世話を焼くべき侍女たちは頼りにならず、姉が応対に出ざるをえない。男はそつと室に侵入し、女をとらえる。女は男をたしなめるが、男も、「私の気持をわかって下さらないからで、無体な仕うちなど思いも寄らない」と応酬する。男は手荒な振舞には出ない。夜明けも近い。男も女も、とりどりに美しい。空も白みはじめ、男は室を出るが、女のことか思い出される。男は後朝めかした文を女に贈る。女はまともにはとりあわない。が、ふたりはすでに他人ではないと思ひ込む侍女たちは、女を非難する——こうした展開は、両者ほとんど軌を一にしている。詞章の類似も、傍線等で対照させたごとく、顕著なものがあり、直接交渉のあったことについては、疑問の余地がない。

『とりかへばや物語』と『源氏物語』

中納言殿(薫)より御文あれど、「今朝よりいと悩ましくなむ」とて、(大君へ)人づてにぞ聞こえたまふ。「さも見苦しく。若々しくおはす」と人々つぶやききこゆ。(総角)巻232ページ

さて、この場面では、宇治十帖の薫と大君の対座を意識した叙述がなされているわけであるが、それを「橋姫」
「総角」両巻の二場面を繋ぎ合わせるようなかたちで行なっている点に、特徴が見られる。「橋姫」巻は、月下に姫
君たちの姿を垣間見た薫が、交誼を請うてはじめて大君に相對する所、「総角」巻は、八の宮の一周忌を前に、大君
のもとに押し入った薫が、何事もなく朝を迎える所であるが、はじめての対面ということで「橋姫」巻を、事なくて
明かす夜ということで「総角」巻を、傍線部Dを結節点として、巧みに繋げて一場面に構成したのがここであるとい
える。

ところで、こうした『源氏物語』撰取のありかたであるが、井上氏は、「中納言が吉野の姉君に對してとった態度
は薫のそれである点、外形的に男装だから不自然な態度をとったと文句のつけようがないし、内面的にも上手に理由
をつけている」と、「物語を現実的に自然に見せようとした作者の苦心」を見ておられる。⁽⁵⁾しかし、これはいかがと
思われる。もちろん、そうした側面がないともいえないが、こう評したのでは、この場面にはいったい何のおもしろ
みがあるということになるのであろうか。それを考えるには、次のような澁澤龍彦氏の言が、その機微をよく見ぬい
ているように思われる。

女装した兄の行動とくらべてみても、男装した姫君の奔放な行動は、断然として異彩を放っているように私には
見える。彼女だけが、衣裳交換という一種の人為的な技巧を存分に利用して、同性の目を欺いたり惑わせたりす
ることに、言うに言われぬ性的快味を味わっているらしいのである。だから、この小説には男性間の同性愛はほ
とんど描かれていないが、遊戯的なレスピヤン・ラヴは、おもしろく描き出されている。とくに巻一第二章で、
女中納言が吉野山滞在中、吉野の宮の肌の白い二人の娘を誘惑するシーンなどは、全巻中の白眉ではないかと思
われる。⁽⁶⁾

ここが「全巻中の白眉」かどうかはいささか疑わしいとしても、肯綮にあたる点が多い。実をいえば、女中納言が同

性を惑わすことに一種の快感を覚えている点については、鈴木弘道氏などにも指摘のあることであるが、それを作品の見どころとして認めることがなかったまでである。

さて、この「レスビアン・ラヴ」であるが、作り物語中随一といつてよい『我身にたどる姫君』巻六における前斎宮と侍女との関係のようななまなましいものではない。相手の女の側からすれば、これはふつうの男女の対座であるわけで、男の侵入には、当然ながら、うろたえ身を固くする。一方の中納言はといえば、自らの性は重々承知の上で、女の反応をうかがいながら、男役としての演技を楽しんでいる、といった風情がある。これを「変態的」と評するむきもあるが、『とりかへばや物語』の恋愛場面というのは、はじめの設定が設定であるから、多少ともこうしたトリッキーな色彩を帯びてくるのは必然⁽¹²⁾であって、「変態的」ということ自体を作品評価に結びつけたところで、ほとんど得るところはなからう。むしろそうした場面を積極的に楽しめるか否かに、この物語の読者としての条件の幾分かがあるようにさえ思われる。

繰り返しになるが、吉野を訪れる前の中納言は、妻四の君の不貞を知り、それでなくとも以前から「身の世づかざりけること」(17ペ)を悩みぬいて来ていただけに、その苦しみをのがれるためには、もはや出家以外の道はないように思われたのであった。そのかれにとって吉野行きは、やっとのことで京での憂さをしばし忘れさせてくれる、憩いのひと時を与えてくれた。この姫君たちとの対座の場面も、こうした状況の中での一ひと齣であることを念頭においておくべきである。後朝の文めかして姉君に贈った「今のまも」の歌に最もよくあらわれていると思われるが、思うさま心をのべる中納言のはしゃぎぶりが、よく伝わってくる。また、「男の御さま、はたさらなり」との語り口にも、作者のちょっとしたいたずら心が仄見えるようである。桑原氏は、こうした中納言と姫君たちとの関係を評して、「恋のまねごと」といわれたが、なるほどと思わせる。

桑原氏は、その注釈の〈鑑賞〉欄で、吉野の宮が中納言を姫君たちの部屋へ案内するのを、「どうも、女に男を会

わせる仲介のやりかたである」とか、中納言と姫君たちとの対座の場面が、「明らかに、一人の男と対座する姫君との恋愛の情緒を持っている」などと注記していられるが、結局、ここもまた『源氏物語』の一種の「ヘパロディ」なのだとして大過ないのではあるまいか。本来女である中納言に、『無名草子』で「はじめより終りまで、さらでもと思ふふし一つ見えず、返す返すめでたき人」と絶賛され、後期物語作者がこぞってその人間像をわが作の主人公に付与したところの理想の男性₍₁₄₎ 薫を彷彿させる演技をさせる、当の薫の大君を求める姿が真剣そのものであるだけに、なかばは息ぬき程度でしかない中納言との落差は激しく、また、表現を多量に借り用いていることも、新たな表現をなす以上に、もどきの効果を上げることになった——こう考えるのである。

む す び

以上の考察につき、ひとまずのまとめをつけて、むすびとしたい。

今井源衛氏は、『とりかへばや物語』巻頭の表現構造について論じて、書き出しからしばらくは他奇もなく、「物語を読み慣れた読者には、例によって、と半ばは安心であり、半ばは退屈な」ものであるが、この「歩き慣れた道を、どこまで、この作者がそのまま進んでゆき、そして、どこでそれが新しい意外な局面に読者を連れ込み、あっと驚かせるか(中略)巻頭の尋常の文字は、その裏側から、そうした、それを覆す、目に見えぬ期待によって支えられるところがある」と述べられたが、相似た事情が、ここに見てきた吉野の宮の登場から中納言の吉野訪問に至る一連の展開の中にも、ある程度看取されるのではあるまいか。

吉野の宮の経歴は、ほとんど八の宮の引き写しで、陳腐ともいえるものであるにもかかわらず、端折ったりしようとせず長々と記すのは、似ていれば似ているだけ、その後の、八の宮の訓戒、そして薫と大君との対座の場面の「ヘパロディ」化が利いてくるとの計算がはたらいっていたのかもしれない。読者には、吉野の宮登場と同時に、宇治十帖の

発端が脳裏にダブル・イメージをなすわけであるが、ここには共感をさそうような描写もなく、きわめて平板に叙述は進み、中納言と宮とのめぐりあいへと運ばれる。読者はここでも宇治十帖を想起せざるをえないのであるが、次に突如八の宮の訓戒のパロディが飛び出し読者をおやと思わせ、さらにとどめの擬似恋愛の場面を導く。この中納言と姫君との対座のシチュエーションが、『とりかへばや物語』ならではのものとして、興味の焦点となるのである。

ところで、ここまで宇治十帖の引き写しと称している部分も、新たな要素を加うべきは加え、先蹤にならずで作品固有の自律的な展開に支障をきたすような不手際は、微塵も見出だせない。こうした、一歩まちがえば安易な剽窃にも堕しかねない、際どい『源氏物語』摂取の方法は、四の君密通事件においても顕著に見られたところであるが、他にあまり例を知らない。おそらくこれは、物語の伝統的な設定・場面・表現等の類型に依りかかりながら、あるいはほとんど手を加えず、あるいは少し変化させ、またあるいは逆手にとるなどして、読者の知的興趣を呼びおこし、安心をおうとする技法であろう。従来、いちじるしい模倣の跡を見出だすと、その表現性に着目するまでもなく、安易に物真似と決めつけてしまい、その結果作品は、無難ではあるが、目新しさに欠け、類型的なものを抜け出していないと評されがちであったのは、根本的な見直しを迫られねばなるまい。

近時、『堤中納言物語』について、〈遊戯性〉、あるいは〈へもどき〉の発想といったことが、長編物語とは異質の、短編独自のありかたを探ろうとする試みの中で、クローズ・アップされてきた感があるが、『とりかへばや物語』は長編であることもあり、単一的効果を狙ってくる短編とは異なって、これらの視座のみから作品全体を律することはできないが、部分的にしろ、本稿で取り上げた条のごとく、都合よく説明される所もあり、作品の性格を考える上で、かなり有効な視点を提供しそにも思われる。

かつて松尾聰氏は、『とりかへばや物語』における「可笑味」について、その乏しいことでは定評のある『浜松中納言物語』や『夜の寝覚』と、質量ともに同程度だと述べられたことがあるが、それに対してはやはり大きく疑問

を投ぜざるをえない。もちろん、松尾説が有力だったといっているのではなく、大原一輝氏⁽¹⁸⁾や森岡常夫氏⁽¹⁹⁾のごとく、基本的には「をかし」の文学だと見る立場も一方にはあるのであるが、そこではむしろ、「をかし」の積極的評価よりは、「あはれ」との相関関係において押されがちだとする、情緒の様式論に流れるくらいが強く、『物足りない。やはりそれは、具体的に逐一検証してゆく中からまず浮彫りにされる必要があるであろう。』

『とりかへばや物語』の根本的な性格については、いまだ研究者間において評価のゆれが小さくない。しかし、幸いに今井氏の評注⁽²⁰⁾のごとき精緻な解読作業もあらわれており、今後の読みの深まりに伴い、より豊かな『とりかへばや物語』像の結晶することが期待される。本稿も、そうした方向への一礎石たりうればと考える次第である。

(一九八二年十一月稿)

注

- (1) 「源氏物語の影響をどうみるか 堤中納言物語に及ぼした影響」〔解釈と鑑賞〕昭43・5。
- (2) 「源泉・影響の問題」〔解釈と鑑賞〕昭31・4。
- (3) 「とりかへばや物語」における『源氏物語』摂取——四の君密通事件の場合——〔語文研究〕47号 昭和54・6。『とりかへばや物語』四の君密通事件統放——『源氏物語』摂取について——〔文献探究〕4号 昭54・6。
- (4) 「とりかへばや物語」の引用は鈴木弘道『校注とりかへばや物語』(昭51)に拠り、所出ページを示したが、私に表記・句読等改めた。
- (5) 「とりかへばや物語の主人公」〔中世物語の基礎的研究資料と〕△昭44▽所収。
- (6) 「堤中納言物語」の作風とその成因をめぐって〔堤中納言物語序説〕△昭55▽所収。
- (7) 『源氏物語』の引用は「日本古典文学全集」本(六冊)に拠る。
- (8) 吉野の宮と八の宮との類似をはじめて説いたのは藤岡作太郎『国文学全史 平安朝篇』(明38)であろうと思われるが、清水泰「とりかへばや物語考」〔立命館大学法文学部文学科開設記念論文集〕△昭16▽所収や、井上君江「とりかへばや物語」にみられる『源氏物語』の影響——趣向の類似について——〔立教大学日本文学〕17号 昭41・11に詳しい。

- (9) 桑原博史 講談社学術文庫『とりかへばや物語』(昭53)。
- (10) 「奇怪な花、とりかへばや物語」(鑑賞日本古典文学『堤中納言物語・とりかへばや物語』(昭51)所収)。
- (11) 『とりかへばや物語の研究』校注編(昭48)。
- (12) 今井源衛氏の説明で代用させてもらえば、「主人公兄妹の行くところ、そこには外見から、つまり実情を知らぬ相手から見れば通常の異性間の恋愛だが、実は同性愛であった」ということになり、逆に、相手の方は同性愛的な気持ちで接近してくると、実はそれは異性間の恋愛関係だった、ということになる」(鑑賞日本古典文学『堤中納言物語・とりかへばや物語』(昭51)所収)。
- (13) 周知のごとく、男女相対する高揚した場面になると、当事者を△をとこーをんな▽とのみ呼ぶ(清水好子『源氏の女君』(昭34)等参照)のが、当時の物語のゆきかたであるが、男ならぬ男である中納言を「男」と呼ぶことで、この場面の恋愛的情調を、擬似は擬似なりに一貫したものとすべく、ダメを押したとの感があり、同時に、事情を知る読者には、擬似はあくまで擬似だとのイローニッシュな響きが伴うものと思われる。
- (14) 「新潮日本古典集成」本39頁。
- (15) (12)に同じ。
- (16) 神野藤昭夫「平安後期・短篇物語の位相」(『日本文学』昭51・5)、稲賀敬二「平安末期物語の遊戯性——短編物語クイズ論——」、高橋亨「堤中納言物語の世界——短編性について——」(鑑賞日本古典文学『堤中納言物語・とりかへばや物語』(昭51)所収)等。
- (17) 「更級・浜松・寝覚に描かれた可笑味に就いて——更級日記奥書所載の更級・浜松・寝覚同作者伝説を確実化させようとするための試論の一齣として——」(『平安時代物語論考』(昭43)所収)。
- (18) 「とりかへばや物語の世界」(『語文研究』13号 昭36・10)。
- (19) 「取りかへばや物語の研究」(『平安朝物語の研究』(昭42)所収)。
- (20) (12)に同じ。なお、再版(昭53)にあたって、部分的に補訂がなされている。

〔付記〕 本稿で扱った部分には、従来から説かれてきたことだが、『源氏物語』だけでなく、『浜松中納言物語』の影響もいちじるしい。しかし今回は、論述の錯雑するのをおそれて、意識的にふれることをさけた。後日あらためて論じる機会を得たい。